

常磐松文庫藏『九条家本源氏物語聞書』解題

徳岡 涼

はじめに

室町末期最大の「源氏物語」の古注釈書に中院通勝（一五五六—一六一〇）による『岷江入楚』が存する。しかしながら、現在通勝自筆と目されるものは、京都大学中院文庫に「空蟬」「夕顔」「末摘花」「紅葉賀」の四帖（中院/V/33）を収めるのみである。

この中の、「空蟬」の巻の頭注書入れに朱筆にて、

慶長八年十一九於

水無瀬読之時身もうく

思ひハてぬと

子君の心に面白也

猶又可案之

と認められることは、写真版にて『大日本史料』（通勝没条）にも載せることから広く知られる所であった。

また、井上宗雄⁽¹⁾氏の指摘のように、通勝の家集には、水無瀬における源氏物語の講釈の終了の折の歌を載せている。

同（慶長）十三年水無瀬にて源氏終功の時

一三三九 打ちわたすその名ばかりはいかならん我が身にたどる夢のうきはし

右のような事柄から、『岷江入楚』の完結したその後、水無瀬にて源氏物語を講釈したことは、疑いない事実であった。ところが、その内容については今日まで明らかにされることはなく、僅か伊井春樹氏⁽²⁾によって『九条家本源氏物語聞書』の中の、記事の幾つかが紹介されるに過ぎなかった。

さて、昭和六十三年十月二十五日より二十九日にかけて催された『第三回実践女子大学蔵書展』の、「中世・近世における万葉・源氏——山岸文庫を中心に」の展示目録の中に、この『九条家源氏物語聞書』は、野村精一氏⁽³⁾により紹介された。長文だが、今は、目に触れることも少ないのでここに改めて録す。

これまで学会に紹介されたことのない稀覯の、源氏物語古注釈書。おそらく天下の孤本であろう。写本五冊。外題・内題ともになく、書名不詳。ここでは後補の帙・題簽と、各巻々頭の「九条」印により、かく称した。よって、著者、年代等成立の詳しい事情も全く不明である。帙・題簽には「中院通勝講慶長元和頃写」とあって、これは旧藏者弘文荘のそれとおぼしいが、これは、文中まま「素然」「也足」などの発言として引かれたところがあり、又、末摘花の巻頭に「慶長九壬八月二日水無瀬素然」などあるところから推したものであろう。もっとも夢浮橋の巻々には「慶長十三四月十九日ニ御講釈終」とも明記されているので、書写年代はともかくとしても、本注釈の成立自体は、概ねこの辺りと見て誤りはあるまい。な

お岷江入楚とは、内容的にはかわりは深いようだが、同一注文は持っていない。全般的にはより簡略であり、又声点清濁等読み方に拘わるところが多い。最も特徴的なのは、各巻の末丁に「追」とタイトルした追記を持つていて、岷江入楚の「補注」「追勘」や「秘抄別勘」の如きに近いが、より形式的に整った補注と見るべきであろう。諸注の引用に当たっては岷江入楚の用いていない一葉抄、林逸抄が多用されているところを見るに、むしろこの聴聞者（＝筆記者）は、連歌師かもしれない。いずれにせよ今後の精査を要する。注意すべき書である。

そして、同大学文芸資料研究所により、平成八年三月より、五カ年をかけて『年報』誌上にて翻刻が掲載された。本稿は、この『九条家本』（本稿では、『九条家本』の略称を用いたいと思う。）の成立について、この通勝講釈に関わった人物を中心に考察し、また『九条家本』の内容の一端について明らかにすることを目的とする。

この試みは、即ち中世末期から近世初頭にかけての『源氏物語』の享受の様相の一面を明らかにすることに繋がるのである。

一、伝来について

実践女子大学常磐松文庫に、一誠堂より昭和四十四年に購入されたことは、同研究所の上野英子氏によって確かめられた。しかし、一方で蔵書印をみるに、九条家から、反町弘文荘に買い入れられた経緯が浮かび上がる。

反町茂雄氏⁽⁴⁾の『一古書肆の思い出』に拠ると、「九条侯爵家焼け残りの秘庫開放」という項において、「昭和二十二年一

月に赤坂福吉町の木造旧邸内の、焼け残りの土蔵からの、多くの珍籍が放出した」。とその様子が記されている。その中にこの『九条家本源氏物語聞書』が含まれていた可能性がある。

また、遡ること昭和四年十一月にも一誠堂の買い受けて、九条家から多くの書籍が流出している。その折り一誠堂の店員として、整理、買い立てをしたのが反町氏であった。

この辺りの流通の詳しい事情については、これ以上追求することは、稿者には不可能である。また、後述する『九条家本』の作者と九条家の繋がりについても、いま確かなことは言えない。憶測を連ねることを畏れ、次の項より、成立などについて蓋然性の強い事柄から論じていきたいと思う。

二、成立について―水無瀬における通勝の講釈について

先ずは、『九条家本』の主軸をなす通勝の講釈について考察を加え、その成立過程の一端を明らかにしたい。『九条家本』の成立に関わると思われる年次を含む記載は以下の通りである。(年次順)。

元亀三九月勝竜寺之域にて藤孝御所望にて紹巴講釈あり末座に侍て聴聞

(第二冊・七九丁表・乙女追・〈追〉は追記)

慶長九閏八月二日於水無瀬殿 素然

(第一冊・六一丁表・末摘花)

紅葉賀の巻の「心ぐるしうて」の肩付きに「閏八三日」と存す。

(第一冊・六七丁表)

慶長十三年二月廿三於 水無瀬殿 中院殿也足軒講釈此巻より讀ハしめ給ふ心は此巻は祝言也桐壺ハ不祝言なりこれゆへに此巻を初ニヨミ給り先に芦箏斎ニいさゝか聴今説ノき

りつほを最初ニ書きたるも心を付て見へき事と心前申されけり (第三冊・十三丁表・初首)

慶長十三年四月十九日ニ御講釈終先年称名院殿の御講釈も今日終と御物語也今日石山

の御縁日ニよりて也

(第五冊・八八丁表・夢浮橋)

元龜三年(一五七二)の講釈だけが、時期的に、また講釈する人物が紹巴、發起人は、藤孝であるということから、突出した記事のように見受けられるが、ここで、「末座に侍て聴聞」していたのは通勝と推察される。

この時期、永禄年間に通勝が三光院実枝からの講釈を受けたことは周知のことである。更に、天正七年(一五七九)に通勝發起による紹巴講釈が行われたことは、井爪康之氏により紹介された静嘉堂文庫蔵『源氏鈔』(静嘉堂文庫目録においては『源氏物語之抄』九卷写(松九)の桐壺の巻の奥書により、明らかである。

一五六〇年代より、一五七〇年代にかけて通勝は、いわば学ぶ立場にあった。また、『岷江入楚』は、元々、それまでの源氏物語古注釈を集成しようという藤孝つまり、幽斎の素志を通勝が継いだものであることを考え併せるに、意義深い一条である。

さて、冒頭にも触れた、慶長年間の通勝の水無瀬にての講釈であるが、この講釈がいつ開始されたのか正確なところは、管見の限りでは明らかでない。

では、なぜ水無瀬にて『源氏物語』を講じたのであろうか。通勝と水無瀬との接点を示す重要な記載が『九条家本』に存する。

うはべのなかせはかりはもてつけつへきわさゝもてつくるとはもてなす事心中さへよくは
上つらは何ともしなさうすると云心なり くだしをくだしと濁りもあるへしと院様勅定と
水中御物かたり也 惣ての意は数ならぬ身なれとかく思ひくたし給御心を深く恨み申也下

藹の伊予か妻なれはとてかく理不盡の義はいかゝと恨申也　きはをきはとこそ侍なれとて
とは上藹なれ共今下藹に成たれはとて理不尽ノ御事はいはれさる事とうらむる也

(一冊目・三三丁表・簀木追・〈追〉は追記)

女なとの御かたかへこそ夜ふかくいそかせ給へきかは―かはの出葉ちと聞へにくし院様
仰らる女なとの御かたかへこそあらめ夜ふかく急がせ給へきかはとみれはよしと也　あ
らめと云詞を入れて心にみるへし　水中此物語あり

(一冊目・三三丁表・簀木追)

あばめられてちとわるくいはるゝ様なる心也天子の御句に　わきて吾あばめらるゝもにく
からて　水中御物かたり

(二冊目・三十三丁裏・明石追)

以上、簀木の巻の追記に二箇所、明石の巻の追記に一箇所、すべて「院様」及び「天子」の御説(なお、「院様」「天子」の御説については次項にて考察する)。を伝える形で、「水中」という聞き慣れない人物が記される。この人物こそが「水無瀬」での講釈の鍵を握る人物である。

『讀史備要』には、「水」という一字名の人物として、中院通茂、水無瀬兼成、山圀寺日鎮上人、高松宮好仁親王、中院通林を載せる。二字名の項には「水中」という人物を載せない。また、『顕伝明名抄』に載せる一字名の「水」の人物は水無瀬兼成卿、中院殿通村公、中院殿通茂公である。

そこで想起されるのが、連歌の世界では、例えば「日大」は「日野大納言」、「広中」は「広橋中納言」というように、一字名に官職名の頭文字とを併せて略称とすることがあったという事柄である。連歌関係の資料を陰するに、ただちに「水中」とは、水無瀬兼成(二五一四〜一六〇二)であることが判明する。

『曼殊院目録』⁽⁶⁾の中の、文禄二年十一月二十六日興行の九条植通の八十賀のための和漢百韻聯句の連衆の中に、「水中」

の名を見いだす。発句は種通で、「霜をふる松や十かへりみな瀬やま」である。以下はその目録からの抜粋である。

玖九条植通 水中水無瀬兼成 大炊大大炊御門経頼 日大日野輝資 広中広橋兼勝

右衛高倉永孝 三位中雅枝朝臣飛鳥井 氏成朝臣水無瀬 集雲守藤 東福寺 光

沢天倫 東福寺貞増 周陽泰甫、南禅寺歟 東案 紹員 久林

なお、この和漢聯句において水中は、十一首と最多である由であるが、従兄弟に当たる九条種通の八十の賀に際しての連歌であると考えたと領ける。

また、年次は不明であるが発句を「いそちふる時雨をけふの袂かな 水中」とする和漢聯句が広島大学福井文庫（国文学資料館請求記号 広大福井一六七五）にも存している。ここにおける「水中」とはやはり「水無瀬兼成」のことであろう。

なお、この連衆は、「水中、自笑、周陽、宗鎮、氏成、雄忠、重治、等安、玄朝、宗三、日中」である。

水無瀬兼成については、三条西実隆の『再昌草』に載せる以下の詞書と歌とがその出自を端的に表している。

永正十一年（一五二四）十一月二八日

廿八日孫童 一歳二男 中納言水無瀬の養子につかはすと思ひつゝけし

立ちそひて松に小松の末をとく まもらん千世の日影をそ思ふ

中納言水無瀬、つまり水無瀬英兼の養子として、三条西公条の二男で、実条の弟に当たる兼成は、水無瀬家に養子に出されたのである。

さて、そのほか管見に及んだ「水中」の名を有する記事は以下の二例である。一つ目は、『実条公御詠草』慶長三年自筆（早稲田大学図書館蔵・へ二・四八六七・一八）である。

正卅夜、水無瀬中将之都の宿にて俄当座十五首

題は拙字也、人数は四人頭也、クトモニサクリ也

クトクゐん拙字也、水之内者

水中

海霞

若菜

夜梅

水中

春雨

初恋

聞恋

クトク

水ノ内人

逢恋

別恋

旧恋

水中

水中

山家

籬竹

羈旅

クトク

この歌会については、井上宗雄氏⁽⁷⁾によつて、「慶長三年兼成・氏成に歌会を行い（実条詠草）」として紹介されている。慶長三年、兼成は、既に権中納言であつた。右の詞書にいう「水無瀬中将」とは、兼成男水無瀬氏成（一五七一―一六四四）である。「水中、水ノ内人、クトクゐん」そして「実条」の四人で行われたこの歌会の「水中」は、水無瀬兼成と推すには検討を要するようである。

「水ノ内人」が、水無瀬中将を指しているのならば、問題はないが、誰なのか判然としない。つまり「水中」を、水無瀬中将の略称として用いている可能性が考えられないかということである。そうすると、この記事の中の、「水中」は、水無瀬氏成を示すことになる。稿者が、このように危惧するのは、次に掲げる武井和人氏⁽⁸⁾により紹介された宮内庁

書陵部蔵『実条公遺稿』（柳・三二三）の存在がある。

これは、三条西家の蔵書を幽斎や通勝等が借り出し、その恩恵に浴している様を知る手掛かりとなる書名やその所在を記した覚え書きである。氏によると、『実条公遺稿』は、資料の中の「慶長十七年虫弘ひ」という記事により慶長末年の成立かと推されている。

膨大なので考察に必要な箇所のみ引用とするが、この資料の〔遣迎院（迎院ニ遣ワス）〕の項目の中に、「但水中ニ有カ 例時懺法〔筆実隆表紙赤也〕水中将〔但九カ花山少将カニマルカ〕……カウソキ〔二冊筆実隆但九ニアルカ水無瀬中納言〕』という記事を見いだす。

順をおって考察する。「但水中ニ有カ」というのは「水中」の所に「例時懺法」は有るかと忖度している記事である。次の記事の中の「水中将」とは、水無瀬氏成をさすものかとも思われるが『実条公遺稿』の中には、「甫庵〔慶長九六三〕』という記事が見受けられる様に、累積的に書き入れられ成立したものである。従って、最初に書き下ろされた年月が判らない限り、この「水中将」は氏成の可能性が高いものの、よく判らないのが実状である。

最後の記事の、「二冊筆実隆但九ニアルカ水無瀬中納言」とは、水無瀬兼成のことと推される。氏成が権中納言となるのは、寛永三年のことであり、武井氏の想定される『実条公遺稿』の成立年次を下ることになるからである。

ところで、『実条公御詠草』慶長二年自筆（早稲田大学図書館蔵・八二・四八七・一七）の中には、「廿七日、ヤハタ水中納言家にて十首当内」という詞書を有する和歌が収められている。これは、当時の官職名と照らし合わせ、直ちに、水無瀬兼成のことと理解できる。

煩瑣な考察が続けてきたが「水中」とは、連歌資料により水無瀬兼成を示すと推定されるものの、「水中将」「水中納言」という呼称が両方存在する限り、「水中」に関しても、あるいは「水無瀬中納言」の略称に留まらず「水無瀬中将」

の略称との可能性も残され、兼成、氏成、両者のどちらかは今は判断することが出来ない。

兼成は、前述したように、三条西公条の男である。そして、通為と公条女の男が通勝であり、兼成はもちろん伯父である。したがって、通勝は、その伯父に関係の深い水無瀬にて、『源氏物語』を講釈したということになる。

さて、本稿は、兼成及び氏成の伝記を辿ることが目的ではないので両者の文学事跡の引用は必要最小限に留めたいが、この事に関する研究は殆ど為されていない。従って、『源氏物語』を中心に管見に及んだものの中からここに幾つかの寸描を試みたい。

弘治元年（一五五五）閏十月廿七日に始まった、公条の源氏物語の講釈の終功に伴う、永禄三年（一五六〇）十一月十一日の『源氏物語竟宴和歌』に「あかし 親氏水無瀬宰相 詠つゝ月をあかしの浦波も立帰れ風の間にく」にて出詠している。また、『源氏物語系図』の永正十年本に兼成筆の一本が、桃園文庫に存している。宮川葉子氏により紹介された、蓬左文庫蔵寄合の『源氏物語』の『紅葉賀』『玉鬘』の巻が、兼成の書写と推察されるものであったり、文禄二年五月二日の奥書を有する百首歌が残されていたり、『言継卿記』の同四年十一月一日条によると、徳川家康に「伊勢物語」を講釈し、『伊勢物語』の古注釈も遺している。

さらに、池田利夫氏により、紹介された陽明文庫蔵、近衛信伊等筆本の寄合は、松風の巻を水無瀬兼成が、真木柱の巻を水無瀬氏が書写したものである。また、松井文庫には、幽斎筆の水無瀬家宛の貴重な書状（二七九七）が収められている。以下にその翻刻を掲げておきたい。

（本文）

先日者遙々御尋忝候、

將又已前之一卷致返

納候、付墨事任貴意

如此候、結句所々加批語候、旁

狼藉千萬候、猶以拝面

可得御意候、恐惶謹言、

卯月十八日 玄旨（花押）

幽斎

玄旨

水無瀬

羽林 人々御中

書籍一卷を返納すること、「付墨」とあることから和歌の批点を請われ、批語も加えておいたことを伝えるものである。
図録⁽¹²⁾のなかでは、「和歌の批点を請うということから若い氏成への書状」と見られている。このように、水無瀬父子は文学の素養が豊富であった。

更に、『兼見卿記』を繙くに通勝逐電に関連して、

天正八年六月廿日 於殿□水無瀬黄門云、中院〔通勝〕逐電也、就伊予之局之儀也、

不慮之由申訖

という条が存し注目される。

論旨を元に戻そう。兼成は、慶長七年（一六〇二）九月十八日に亡くなっているので、直接慶長年間の一連の水無瀬での通勝講釈を耳にしたか否かは微妙なところである。後掲するが、氏成は『九条家本』の料簡において「氏成」と示される。よって、『九条家本』の中の「水中」は、「氏成」と区別したかと思われ、兼成と推したいところである。だが、前述したように、兼成、氏成、両者の可能性を払拭しきれない限り、その二人である可能性を考慮しながら論を進めていきたいと思う。

この慶長七年は、源氏物語の古注釈にとって大きな意味を持つ年である。慶長七年四月十二日には紹巴が没した。『九条家本』に関係する、換言すれば、公条の講釈を受けた三条西流の『源氏物語』の注釈を受け継ぐ人物を相次いで亡くした年であったことも明記しておきたい。

三、成立について―後陽成天皇の講釈との関わりについて

後陽成天皇の講釈と『九条家本』との関係について、史実との照合を中心に考察を加えたいと思う。

前掲した記載のように、「院様」「天子」の説を伝える記載は「追」（追記）に留まらず、その本編においても「院様」「天子」の説は記される。以下は『九条家本』からの引用である。

めしうと　今ノ代に手かけものなとゝいふやうなる事なりめしと共よむへし　又めしつと共
讀へし是は　後陽成の勅説ト也　とが人をめしうとゝ云事は近代也むかしはなき事也

日本記 やまとぶみと然るへしと院様は仰せらるゝと也 何れても苦しかるましと素然は仰せらるゝ
(第三冊・螢・四丁表)

とざまかうざま此清濁は天子の御説素然へとさものさましも濁て覚ゆと仰らる 何にてもくるしかるまし
後陽成院
(第三冊・若菜下・八二丁裏)

以上より『九条家本』における「院様」「天子」の説とは後陽成天皇(後陽成院)の講釈であることがわかる。つまり、その講釈は、講釈者である通勝や、あるいは「水中」を介して『九条家本』に収められたのである。

ところで、「院様」「天子」という呼称が両方存在することに着目したい。後陽成天皇が、後水尾天皇に譲位し院政を復活させたのは慶長十六年(一六一一)三月二七日のことであった。したがって、後陽成天皇が「院」と呼ばれるのは、それ以降のことである。それはつまり、この『九条家本』の書写年代が元和以降であることを示しており、その成立過程を考える上で重要な記載なのである。

右に掲げた、『九条家本』の中の「螢」の巻の「日本記」以下の記述に触れておきたい。通勝は、慶長十五年(一六一〇)に没している。しかし、この記載は、後陽成天皇が譲位したことを知る由のない、既に没した通勝が「院様」という呼称を用いて講じたという記事になり矛盾が生じる。

しかし、これは、この『九条家本』の聴聞者(筆記者)の側の問題と解せないだろうか。つまり、通勝没後、元和年間、後陽成天皇は上皇となり「後陽成院」と称した。通勝が講じた際の後陽成院に対する呼称ではなく、『九条家本』が筆記されるとき、筆記者が元和年間における呼称を取り込んだとみるのである。いわば聴聞者であり『九条家本』の筆記者の問題と理解するよりほかはなさそうである。

さて、島崎健氏⁽¹³⁾の後陽成天皇の源氏物語講釈についての研究、最近では小高道子氏⁽¹⁴⁾による後陽成天皇の講釈が記されて

いるという（他の注釈書からの引用もあることである）、智仁親王の源氏物語についての研究が、管見に及んだ。

この『九条家本』の講釈と同時期の慶長九年（一六〇四）より、後陽成天皇が講釈を行ったことが島崎氏、小高氏の調査されたそれぞれの『源氏物語聞書』の講釈年月の書き入れより理解できる。

通勝は、この後陽成天皇の講釈を拝聴することが可能であり、まさにリアルタイムに、水無瀬における自分自身の講釈に取り入れていくことが出来たのかもしれない。

慶長九年（一六〇四）より開始される後陽成天皇の講釈は、従来指摘されてきたように『慶長日件録』三月一日条によると

三月小一日 壬子入夜御盃ニ参、御前ニ参、今日、三条西実条卿就発起、源氏物語講被遊由、

有勅定、亥刻退出。

とあることから、そもそも実条の発起によるものであった。

そして、通勝との関係に於いては、特筆すべき事柄として以下の『お湯殿の日記』が挙げられる。

慶長十二年十一月十二日：中ゐん殿して。けんしの御きやうかうあそはす。

同日 十三日：中ゐんめして。けんしの御けうかうあそはす。しやうこゐん殿

ちらとなる。

十五日：二（こ敷）御所にてけんしの御たんきあり。ハてう殿。大かく寺

殿。正こゐん殿なる。くもしまいる。みなくおとこたちも十四五

人しこうあり。

という記事により、通勝は、後陽成天皇と共に『源氏物語』の校合を行っていたことが確かめられる。このような立場から得られた後陽成天皇の説を通勝は、水無瀬での講釈に取り入れていったと考えられる。

さて、一方、『九条家本』の「追記」における「水中」を、水無瀬兼成と仮定した場合、前述したように慶長七年には亡くなっている。慶長九年より始まった後陽成天皇の講釈を拝聴することは出来ない。

そこで『お湯殿の日記』を辿るに慶長五年の四月から六月にかけても後陽成天皇の『源氏物語』講釈の記事が散見する。

慶長三年四月十一日：けんしはつねのまき也。女中おとこたち御ちやうもんあり。小夜ふけ

かたにはてゝ。みな／＼たいしつあり。……みなせ中納言よりいはなし
一折まいる。

慶長五年四月廿一日：けんしの御かうしやく御所にあそはす。御所／＼。女中。おとこたち

御ちやうもんあり。

慶長五年五月三日：けんしはゝ木の御かうしやくあり。御ちやうもんあそはす。：

八日：けんしはゝ木の御かうしやくあり。女中。御はんしゆ御ちやうもんあり。

中のゐん侍従の中納言たんこよりのほられてしこうあり。

六月五日：なかのゐん御まいりにて。けんしのかうしやくあり。：

慶長五年の後陽成天皇の講釈が、『九条家本』の講釈と同様、初音の巻から開始されていることは嘉例に従うものである。右の記事の中の、聴聞者が「おとこたち」と片づけられているので、兼成がその中に含まれていたかどうかはわからないが、更に、以下の様な記事が存する。

慶長五年八月廿二日：みなせ中納言はつたいの後けふしこうあり。女御より申候てかりまい

らるゝ御はつをとて御なまいる

兼成は、慶長五年八月廿一日に出家し慈興と称したが、その翌日には後陽成天皇に伺候したことなどを考え合わせるに、慶長五年五月の後陽成天皇の講釈を兼成が拝聴していた可能性が考えられる。

あるいは、「水中」を水無瀬氏成の事と解すると、慶長九年より行われた後陽成天皇の講釈を拝聴していた可能性は十分であり、こちらのほうは直ちに『言繼卿記』の慶長九年十月十八日条に、その名を見いだす。

十月十八日甲子、天晴、禁中黒戸ニテ源氏葵御講尺有之參仕衆西園寺大納言、花山院大納言、予三條宰相中将、鷲尾宰相、三條三位中将、光廣朝臣、氏成朝臣、之仲朝臣、実久朝臣、季繼朝臣、秀直朝臣、忠長朝臣、總光朝臣、為親朝臣、雅賢、時直、基久、隆致、宗信、顯成、秀賢等也、

史実との照合においても「水中」とは、水無瀬父子の両者の可能性が存し後考を俟ちたい。

四、聴聞者（＝著者）について「私」及び「某」の記事より

講釈する立場の考察は以上とし、この項では、聴聞者（＝著者）についての推定を試みる。まずは内部徴証によりその人物を絞っていききたいと思う。

兼成男、氏成が通勝の講釈を聴聞していたことは前述の通りだが、具体的には『九条家本』の料簡の一部に、以下のようない記事が存する。

／桐壺の帝と申は延喜ニ比して書たりされとも押出して延喜と云事はいかゝ只桐壺ノ帝ニ

して置へし朱雀院は既ニ御名をあらはすうへは朱雀院也其不審王代記ハ延喜朱雀村上冷泉
圓融也是を此物語々ノ系図ニあてゝみれば村上なし如何素然御答よくこそ不審申人昔も
今も左様ニ云人ありされ共其は此物語の奥義を能知さる人也当流さ様ノ事にては強たか
ゝはらす此物語つくりものかたりなれハ虚もあり実もあり王代記ニハ相違のこともあり唯
此物語の系図の如ニ見て置へし強いて沙汰して無益の事也 私思伊勢物語の奥書ニ上古之
人強不可尋其作者只可翫詞花言葉而已如此黃門書給へり是等と一意歟（此不審申候時氏
成も／同席にて御聞候）以下略 〔 〕は割注。（第一冊・料簡・一丁表から裏）

『源氏物語』の準拠論への言及の後に付け加えられる、「私思伊勢物語の奥書」の「私」こそが、この『九条家本』聴聞者
であろう。割注にて示される水無瀬兼成男の氏成の名がここに挙がっているのは当然といえは当然である。

しかし、この肝心の「私」とは誰か。

冒頭に掲げたとおり、『九条家本』の主軸を為す通勝の水無瀬にての講釈は、『岷江入楚』の記事と完全に重複すること
は稀少であるが、以下の天文年間の記事は、『岷江入楚』にも後述する一部を除いて違わず載せる。（幸いこの巻は、通勝自
筆の巻が残っており、この箇所が『岷江入楚』成立当初から存していたことが確認される）。

いくそたひ君かししまにまけぬらん―天文八年五月十二日議定所ニ於テ講釈の時じゝまは
河海に日本記を引て退の字尤トモ可然と云ゝわか幾度もそなたの進退ニ負て堪忍する也
物ないひそとは承ざる程に也当時みなじしまを無言ノやうニ心えて用るは僻事にや進退の
字の心也しかるをしゝまに鐘つくかたに取なしてよそへ云るなるへし人の我まゝに物をする
をしまいにすると云は此道理也進退の字をじゝまいてとよめるニ通へるにやとおへた

り然らはじゝまいと声を読へきにや先公此声を用給へり 私云先公トハ逍遙院也此抄は称名院ノ也 又則某申云此事講釈過ぎて也足様之御本を申しうけて其まゝ写置所なり私トこゝにあるは也足之御事也

(第一冊・六六丁表から裏・末摘花)

「いくそたひ君かしゝまにまけぬらん」につけられるこの部分の注記は、『岷江入楚』にも「天文八年」から「称名院ノ也」迄を違わずに載せる。その後文の「又則某申云」により、『九条家本』のその箇所は『九条家本』の筆記者とおぼしき「某」が通勝講釈の後「也足様之御本」を借り受けて写したということがわかる。

この「某」が「料簡」に示す氏成と同席して、通勝の講釈を聴聞した人物と同一人物かどうかはわからない。しかし、「某」という人物は、『九条家本』の以下の記事にも載せる。

誰ものときめかたき世なれと誰か春にして長閑からましトアルニなかめてもおもへ我身の夕霞 宗牧付句也 宗碩長點あり此物語の心也おもしろく付けたると也足被仰けり此一巻ノ正筆ある人幽斎へ進上ス其時拝見則某モ写して所持也

(第三冊・柏木・九二丁表より裏)

幽斎は、弘治二年(一五五六)に『宗牧連歌集』を編んでいる。その奥書は以下のように記す。

右一冊方ゝ以懷紙書写之者也 細河兵部大輔 藤孝判

千時弘治二年六月日

しかしながら、『宗牧連歌集』の奥書きには「以懷紙」とある。一方『九条家本』の中の「某」が写したものは巻物であると示す。ゆえに、形態が異なり、この『宗牧連歌集』が編まれた時期を成立の考証に用いることについては慎重でなければならぬ。また、弘治二年以前に、幽斎は、宗牧の連歌を収集していた可能性は高いが、それ以降に、進上された可

能性も又、否定できない。通勝も進上された宗牧連歌を知っていることを示す『九条家本』の記事から、通勝が勅勘を蒙って、逐電された天正八年（一五八〇）以降に、その一卷は進上されたとみるのが穩当であろう。

以上の記事から、通勝、幽斎に非常に親しい人物が、「某」であると想定されるわけだが他にその人物を限定するために、手掛かりはないものであろうか。

五、聴聞者（＝著者）について——紹巴との関係において

『九条家本』の注釈には、一つの法則があることに気付かされる。通勝や、三光院の説に対しては、敬語が用いられている。しかし、紹巴はその限りではないということである。幾つかの例を挙げると

きこえ給て本書きて——三光は本書きてとあそはす紹巴は手本書きてと讀ム三光の御説の如クなればてもし上へ付けて讀ム三光ノ御説の如クなればてもし上へ付けて讀へし

（第一冊・賢木・二丁裏）

御馬 愚本ニハあを馬とあるを紹巴なをして御馬と書たり素然は青馬と讀給り如何く

（第二冊・乙女・七六丁裏）

つへき——一本ニ心よはくもとめ給つへきともあり（巴の本にはなし） 源氏ノ御心切なるまゝ
 ならはかの致仕の大臣のこゝろよはく見給んと源しの御心のつかひなり林

（第四冊・御法追・十七丁裏）

散見するその他の紹巴に関する注記にも、敬語はいっさい使われていない。三光院及び紹巴の説は、通勝の講釈の中に引

用されたものであり、直接に『九条家本』の聴聞者に紹巴が講じたものではないため、紹巴に対して敬語を使わないのは、講釈者である通勝の立場ともとれる。堂上と地下という身分の差からくる意識の表れなのかもしれないが、一方、先述したように、通勝は紹巴に『源氏物語』の講釈を所望することもあった。従って、この紹巴に敬語を用いない理由についてはなかなか判然としない。この方向からの考察は、今おくとして、通勝のこの講釈において（もしくは、『九条家本』をまとめる段階においてなのかもしれないが）、この「某」は紹巴が校合した本文を持つ『源氏物語』を手元に置いていたこととわかるのである。

例えば、二番目に掲げている「御馬」の例に、少しく説明を加うる。もともと「あお馬」とあった本文を紹巴は「御馬」と改訂したのである。そして、通勝が異なった『源氏物語』本文である「青馬」と示すので、「如何／＼」とそれらに対して何れとも決しがたいという態度を記しているのである。それは「愚本」と称され、紹巴が訂正を施した一本なのである。このことは、やはり、紹巴近辺の人物が、この聴聞者（＝筆記者）として相応しいのではないかという推定が促される。本稿では、掲げた記載の中の「私」や「某」なる人物が仮に同一人物を指すものとして『九条家本』聴聞者（＝筆記者）を想定してみたい。

この『九条家本』の成立の下限を示すと思われる記載は、先掲のどの記事でも良いのだが、後陽成天皇を、「院」の呼称を以て記されるものである。前述したように、この事柄により『九条家本』の書写年代が、元和年間以降であることを示すのである。慶長年間の通勝の講釈を聞き、元和年間にも生存していた紹巴近辺の人物が、この聴聞者であり筆記者であると推察されるのである。

ところで、この『九条家本』は『年報』（十五・十六・十七号）の口絵並びに本稿末尾でも、写真版を紹介してきた。筆跡等という領域は、主観的な問題でもあり判断の困難な作業であるが、それでも、「紹巴周辺の人物」に拘泥するのには理

由がある。

それは、山口県毛利博物館所蔵の『毛利元就句集』⁽¹⁵⁾の存在である。これは、元就の連歌を紹巴が編集書写したもので、前半が付句四九句、後半が発句三十句の元就の句を選び、その全句に評語を加えたものである。

長文の奥書の中に、「元龜三年二月はしめこれをするしをはりぬ」とあることから、その成立年次は明らかである。この紹巴筆の『毛利元就句集』にガラス越しではあったが至近距離にて接したとき、この『九条家本』の筆跡と何らかの繋がりを感じさせるには十分のものであった。

更に、『久我家文書』⁽¹⁶⁾に収める紹巴の書簡も、観覧したがこれも基本的には、何か『九条家本』の筆跡と同一線上にある印象を持った。この二点に限らず紹巴の書とされるものと、『九条家本』との筆跡は極めてよく似ている。しかし、紹巴はこの『九条家本』の書かれた時期には既に没している。

さて、具体的な推定を試みる。紹巴に最も近い人物として、連歌師としての後継者であり更に実子でもある玄仍、玄仲。そして、昌休の男である昌叱、昌叱の男である昌琢が挙げられる。それぞれ、前者を里村北家、後者を里村南家と称し、それは対立する関係にあるのではなく婚姻関係によって結びついていたと奥田勲氏⁽¹⁷⁾により明らかにされたところである。

『九条家本』の成立年次、つまり、慶長年間の水無瀬にての通勝の講釈を聞き、元和年間にも生存している人物が最もその可能性の高い人物と推定される。

北家の玄仍、玄仲をみた場合、この二人の没年を確認するに、玄仍は、若くして世を去っており慶長十二年（一六〇七）没、玄仲は、寛永十五年（一六三八）没である。そのことから、北家の中では、玄仲の可能性が高い。

さらに、南家に目を向けると、昌叱は、慶長八年（一六〇三）没、昌琢は、寛永十五年（一六三六）あるいは三八とする説あり

没。よって、昌琢の可能性が高いということになる。

さて、玄仲、昌琢の筆跡についてである。玄仲自筆のものとしては、纏まったものとして関西大学図書館蔵『万葉集宗祇抄』（911、224、S1、1）がその奥書を伴うものとして挙げられる。この『万葉集宗祇抄』は『九条家本』とは同筆ではなかった。宮内庁書陵部において玄仲の短冊を拝見する機会も得たが、『万葉集宗祇抄』とは同筆といえるが、『九条家本』とは別筆であった。陽明文庫に存する玄仲書状（国文学資料館請求記号35—56—587）などは、『九条家本』の筆跡と似通っているようだが、書状という性格もあって判断が難しい。

また、昌琢の筆跡は、多く『日本書蹟大鑑』にも納めており、手近に見ることが出来る。しかし、これも良く似てはいないのだが、決定打に欠け今後の調査を要する。

六、通勝講釈の聴聞者達、あるいは通勝講釈に関係する人物について

『九条家本』における通勝の講釈に同座していた人物、もしくは、この講釈に少なからず関係していた人物について、いささか考察を試みる。

すぎくしう 三条殿はすぎくしう也足はすぎくしう也清濁少しかはる

（第一冊・八四丁表・花宴）

あふきゝこえさするを―也足ハウキト給り後來三条殿ニ尋候へはアヲキト読みてもくるしか
らすと仰せられ候
（第三冊・六十丁表・若菜上）

ここに載せられる三条殿とは、三条実条では（一五七五―一六四四）あるまいか。父公國（実枝男）を早くに亡くし、幽斎から

歌学を学び、また古今伝授も受けている。『九条家本』に以下のような記載がある。

人の御心ゆくへき手のかきりをつくさせ給ふ

此詞朱にてそばにかた假名にてかく是三条家ニかきる也

(第二冊・九五丁裏・胡蝶)

これを『日本大学蔵三条西家証本』⁽¹⁸⁾と照らし合わせるに、確かに朱にて書き入れがあることが、確かめられる。幽斎は、しばしば三条西家から『源氏物語』を借り出し、書写している。内に通勝も寄合の一人としてその書写に参じていることは、熊本大学寄託永青文庫蔵『源氏物語』(丑上―一)などによって明らかなのであるが、その書写の折に、右に掲げた胡蝶の巻の『九条家本』の箇所を通勝が控えており、講じたともとれるが、このような事情に一番精通しており、水無瀬での講釈に同座しそうな人物となると実条が、最も相応しいであろう。

その他、三項目に掲げた初音の巻の記事の中に見いだされる連歌師心前(生年未詳、一五八八)も挙げられる。更に、直接この通勝の水無瀬においての講釈に同座しているとは言えないが、以下の記事により寿命院も挙げられる。

御ぞう 曾此字なるへし昔より色々云共此義しかるへし曾孫¹⁹なと云にも是を書也

寿命院是を見いだされたと素然御かたり候

(第四冊・三三丁裏・竹川)

この寿命院とは、医者である秦宗巴(一五五〇―一六〇七)かと推される。

ところで、中院通勝男である通村の源氏、伊勢、百人一首の注釈は、日下幸男⁽¹⁹⁾氏の調査によって明らかにされたが、氏の論考の中に、中院通茂筆かとされる、京都大学陳列館古文書室蔵中院文書(七二/二四九)包紙上書「覚書」の一通(三六×五三厘)が収められ、その中に注意を要する記事が存在する。今、氏の紹介に拠りその一部を、改めて録したい。

……源氏ハ也足読申候時ノ後十輪院聞書有之候。是も焼失候。……

後十輪院も通勝の講釈を「聞書」していたが焼失してしまった。という記事である。この講釈が『九条家本』と時を同じ

くするものか否か判らないが、通村も何時かの通勝講釈に連なっていた可能性を感じさせる一節である。水無瀬にて講じられた通勝の源氏講釈の様相が、多少、具体的になってきた。最後に、この『九条家本』の内容について触れておきたい。

七、『九条家本源氏物語』の内容について

この項にて扱わなければならない事柄は実は多岐にわたるのが実情である。しかし、ここでは通勝が講じる際に用いた三光院の説を中心にする考察、『岷江入楚』との相違を示す『林逸抄』の引用、さらに、「清点と濁点」及び「読み」にかかわる注記について、以上三点に絞っての瞥見を試みたい。

『九条家本』の若菜下の巻の中段に、以下のような記事が存在する。

宮にいとよく―是より以前は臨江斎ニ聞是より以後は末まで透して三光院ノ御講釈を聞

と素然御物語也

(第三冊・若菜下・七八丁表)

みぎわにまさりてなん

涙の心也紹巴発句になかれよりて汀まされる氷かな

三光院難

し給るとそ

(第二冊・須磨・一八丁表)

打過ましや―三光院はし文字を清給へり紹巴は濁れり如何々

(同・二二丁表)

という記事が散見する。

右のように、紹巴、三光院の説が引かれるが、これは若菜下の記事を信ずるならば、『九条家本』はそれぞれの講釈を受けた通勝が、それらの説を取り入れながら、慶長年間に行った講釈の聞書であるということになる。

ここでは、三光院の説に触れておきたい。

問題となるのは、『岷江入楚』の料簡に記される「此抄引所肩付」の中の「箋」との相関関係である。

箋 三光院ノ義此内或ハ被抄出之処アリ 然而若菜下ヨリ宇治十帖は予聞書を箋ト載了桐
壺より明石巻までは彼抄ノ分を箋と書 聞書を箋聞之此内私ト書之者予今案之義也諸抄ニ

不注之所ニ肩付之分は予カ注加之諸抄ニ相違有テ其外ニ今案を註付ル分ヲ私ト註之了

伊井氏⁽²⁰⁾の指摘されるように、『岷江入楚』を著すに当たって、収集した諸注釈の中の一つに「三光院」の説があった。その「三光院」の説とは、実枝自身が纏めた注釈書と通勝が実枝の講釈を聴聞し纏めたものと二つ別々のものであった。そして、その両方が手元にある明石の巻までは、実枝自身が纏めた注釈書を『岷江入楚』に引用するときには、「箋」と記し、また、通勝自身の聞書からの引用は「箋聞」とし区別したというのである。更に、通勝自身の聞書のみが存する若菜下より宇治十帖までは「箋」と記したというのである。

『岷江入楚』所引の実枝の注釈の実際の様相については伊井氏に従いたい。料簡の中の記載の「然而若菜下ヨリ宇治十帖は予聞書を箋ト載了」は、直ちに『九条家本』の「みやにいとよく」と符合を見るわけではない。しかし、それが同じ若菜下であることから、この箇所以降を通勝は実枝講釈を受けていたという公算が高い。

また、『九条家本』には三光院の名前が伊井春樹氏の『岷江入楚』における調査からは、検出されていない巻にて見いだされる。いずれも直接三光院の文学事跡に関する事柄である。

齋宮 伊勢ノ齋宮は帝一代ニ一度つゝかはり給ふ也是ニよりて不吉ノ例也賀茂のは其身ノ
御かけれ次第ニおり給也

に続いて押紙にて

國かはりつゝ帰る都路巴ふりすて鈴香山〔三光院殿〕

（第二冊・賢木・二丁裏）

更に

すさましきためしに―古抄共に委し 三光院御哥ニ春待し心浅さよ冬の夜かすまぬ月□

匂ふ梅かゝ右ノ心也

（第二冊・朝顔・七二丁表）

実技の源氏講釈とは、異なる次元での問題かもしれないが、『源氏物語』の各場面から想起される事柄を連歌に、和歌にと実枝が取り入れていることが理解できる『九条家本』における記載である。

次に触れておきたい事柄として、『林逸抄』との関連がある。『岷江入楚』との最大の相違の『林逸抄』の有無である。当時の『林逸抄』の享受の有様を伝えるものとして『近衛家文書』に収める以下の書簡がある。

誠久不得尊意候、仍林逸抄玉鬘より真木柱まで十冊則懸御目候いつまでも不苦候

（表書）

六日

滋野井殿

通勝

「誠久不得尊意候」から『林逸抄』を手にした通勝の口吻が伝わってきそうである。

通勝が、水無瀬にての講釈に『林逸抄』を持ち込んだという確証は右の記事からは得られない。しかし、林宗二による『林逸抄』が、通勝の手に渡っていたことは明らかで、そのルートから『九条家本』における講釈の最中に用いられた可能性は、十分にある。

また、以下のようなルートも考えられる。紹巴は林宗二（二四九八―一五八一）とは早くから交流があり、『林逸抄』が里村家に伝えられた可能性がある。よって、この『九条家本』に取り入れられた経緯については、その両方の可能性がある。さて、この『九条家本』の『林逸抄』の引用にはいささか注意が必要である。

前述したように、「追」の箇所のみ『林逸抄』の引用がされる。以下、大まかな傾向を示すと、冒頭の巻々には散見するものの紅葉賀以下、野分の巻まで、その引用を示す「林」という文字を付す註は存在しない。以後、次第に『林逸抄』の引用は増大し、宇治十帖における「追」はまさに『林逸抄』によって形成されているとしても過言ではない駄である。今、事の詳細に触れないのには、「林」という出典名を記さなくとも『林逸抄』を引用するためである。

また、「尋」として注を引用する箇所が、「追記」にまみ見受けられるが、それは、『尋流抄』からの引用である。近時、井爪康之氏によって、翻刻が刊行されたが、『岷江入楚』には遂に見いだすことのない『尋流抄』を引用することは注目される。これは、『林逸抄』所引のそれである可能性⁽²²⁾が大きいが、『岷江入楚』との大きな相違点の一つであろう。

第三の特色である「清点」と「濁点」に関する注記の多さや、「読み」に拘る註についてみておきたい。

この時代の『源氏物語』の講釈における「よみくせ」の事情については、遠藤邦基氏の研究に詳しくそれに抛りたいと思う。「江戸時代初期の後水尾院（一五九六―一六八〇）を中心とする堂上における源氏物語講釈の実態を知る上での有力な資料である」とされるものに京都大学蔵『源氏清濁』が存する。この『源氏清濁』についての成立については、「貞亨（一六八八）三五六日御抄出之説」（柏木）若しくは、「延宝七（一六七九）抄出之説」（若菜下）の頃と推されている。また引用される人名の中で「紹巴、三光、也足」といった『九条家本』においても関わり合いの深い人物が散見することから『九条家本』を含めその三著の関係についてはこれからの位置付けが必要である。

むすび

『九条家本』の紅葉賀の巻は以下のような冒頭である。

此えんも清涼殿にてあり此卷異に面白と古人も申傳えたり

也足御説

これは、著名な『六百番歌合』の中の俊成の判、

花の宴の巻は、殊に艶なる物也

を受けてのものである。その判詞は、周知の通り以下の言辭へと続く。

源氏見ざる歌詠みは遺恨ノ事也

通勝もまた、後陽成歌壇の重鎮であつたことを思い合わせるに、この「也足御説」は、歌学の書の一つとして『源氏物語』が読まれてきたことを踏まえる言辭にて、通勝の『源氏物語』に対する認識の一つをよく表している。

この『九条家本』には右のように『岷江入楚』には収めない通勝説を載せる。そこには『岷江入楚』を著した後にも『源氏物語』を追求し続ける通勝の思索の姿勢や、或いは、右に掲げたように歌人としての側面が表出されている。

孤本としての意義と共に、中世から近世への『源氏物語』享受の様相を知るに貴重な書であることは間違いない。本稿が、その有様を知るための一助となればと思う。

注記

引用文献

- (1) 井上宗雄「也足軒・中院通勝の生涯」『国語国文』昭和四〇年一月
- (2) 伊井春樹『源氏物語注釈史の研究』昭和五五年十月第五章実隆の源氏学とその展開 第五節公条の「源氏物語秘抄」七一頁
- (3) 野村精一『第三回 実践女子大学蔵書展 中世・近世における万葉・源氏——山岸文庫を中心に』 実践女子大学文芸資料研究所 昭和六十三年十月
- (4) 反町茂雄『一古書肆の思い出』3 平凡社ライブラリー 平成十年

- (5) 井爪康之「静嘉堂文庫藏『源氏鈔』〈源氏聞書〉について」『国語と国文学』平成元年四月
- (6) 赤瀬信吾『曼殊院藏 連歌連歌作品目録並年表』『国語国文』昭和五十三年一月
- (7) 井上宗雄『中世歌史の研究 室町後期 増補版』平成三年三月
- (8) 武井和人『中世和歌の文献学的研究』笠間叢書 平成元年 明治書院
- (9) 宮川葉子『源氏物語の文化史的研究』平成九年十二月 風間書房 第一節逢左文庫藏「三条西家源氏物語」成立の事情 一〇四頁 なお、同頁水無瀬家についての考察がある。
- (10) 百首和歌『中世百首歌3』古典文庫 昭和五十九年十一月
- (11) 池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』昭和六十三年十二月 笠間書院
- (12) 『松井文庫名品展(Ⅰ)松井文庫の絵画と書蹟』昭和六十二年 熊本県立美術館
- (13) 島崎健「後陽成天皇講「源氏物語聞書」」『国語国文』昭和五十三年一月
- (14) 小高道子「智仁親王の源氏物語研究」『中古文学』平成十一年五月 小高氏によると、『智仁親王御記』については、慶長六年二月三日条に、「也足軒伺公。はゞきゝの巻少講談アリ」と記されている。
- (15) 『毛利元就展 その時代と至宝』平成九年 毛利元就企画委員会NHKプロモーション
- (16) 『特別展観 中世の貴族 久我家文書修復完成記念』國學院大學 平成八年四月
- (17) 奥田勲『連歌師——その行動と文学——』評論社 昭和五十九年十一月
- (18) 『日本大学図書館三条西家証本』八木書店 平成六年
- (19) 日下幸男「中院通村の古典注釈」『上方芸文研究会 みをつくし』創刊号 昭和五十八年一月、なお本稿引用の記事は、全て野村精一氏の「源氏物語古注釈の成立過程——付、新資料架蔵高倉永慶筆「中院殿源氏講釈聞書」草稿影印——」『実践国文学』平成四年九月にも再録される。
- (20) 伊井春樹前掲著
- (21) 井爪康之『尋流抄』平成十二年三月 笠間書院
- (22) 稲賀敬二「林逸抄所引の源氏物語尋流抄をめぐって」『古代中世国文学』第一号 昭和四十九年二月
- (23) 遠藤邦基「よみくせ」と連濁——源氏清濁の疊語を中心に」『国語語彙史の研究』五 国語語彙史研究会編 和泉書院 昭和五十九年五月 『源氏清濁・岷江御聞書』京都大学資料国語国文叢書37

(24) 松村雄二「源氏物語歌と源氏取り——俊成「源氏見ざる歌よみは遺恨の事」前後——」『源氏物語研究集成』第十四卷 平成十二年六月 風間書房 は、六百番歌合における俊成の著名な立言に対する今日の研究を総括している。

参考文献

土田将雄『細川幽斎の研究』昭和五十一年 笠間書院・『続・細川幽斎の研究』平成六年同

「後陽成院とその周辺」林達也 「中院家の人々」鈴木健一 『近世堂上和歌論集』近世堂上和歌論集刊行会編 平成一年四月 明治書院

奥田勲「紹巴年譜稿」(1) (4) 宇都宮大学教育学部紀要 昭和四二〜四四年十二月、四八年十二月

〔付記〕

本稿の一部は、平成九年八月、於「第二回文芸資料研究所研究会」「常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』における「水中」について——中世末期連歌と源氏物語——その周縁」の発表に大幅に加筆修正したものである。当日、席上にて、また、私信などにより御教示を下さったエスペランサ・ラミレス・クリステンセン氏、鈴木淳氏、落合博志氏、浅田徹氏、武井和人氏、辻本裕成氏、野村精一氏、横井孝氏、上野英子氏に厚く御礼申し上げます。

また、貴重な典籍の閲覧をご許可下さいました京都大学付属図書館、関西大学図書館、宮内庁書陵部、熊本大学付属図書館寄託永青文庫の方々に、御礼申し上げます。

〔追記〕

脱稿後、熊本大学付属図書館寄託永青文庫に存する「源氏物語」の寄合書（丑上―一、丑上―三）に、幽斎、通勝はもとより、水無瀬父子、紹巴、心前、宗巴等が携わっている事に気付きました。改めて御報告の機を得たく存じます。

